

〈書評論文・書評〉[書評]

Miyuki Nagatsuji, *The Pragmatics of Clausal Conjunction*
(*Hituzi Linguistics in English No. 33*),

Tokyo : Hituzi Syobo, 2021, xii + 160p., ISBN 978-4-8234-1069-7*

西 田 光 一

山口県立大学

1. はじめに

本書は著者が 2018 年に奈良女子大学から博士（文学）を授与された学位論文を改訂したもので、全 7 章から成る。参照文献を見れば分かるとおり、著者のそれまでの研究歴とほぼ重なる 10 年来の蓄積を一書にまとめてあり、現時点における日本語の節と節の等位接続に関する到達点とも言える研究である。全章、英文で書かれており、理論的には Ariel (2012) の英語の and の等位接続の解釈の 2 分法に基づいているが、主たる事例は日本語の接続形式にある。また、タイトルのとおり、本書の主題は節間の等位接続の語用論的研究であって、意味論的、または文法的研究とは違うという主張が込められていると思われる。

もちろん、節間の等位接続は日本語学においても先行研究が多く積み重ねられており、著者も幅広く取り入れている。これは日本の大学での「英語学」のモデルでもある。英語圏、特に英米の理論言語学の学説（ここでは Grice の会話の推意や関連性理論など）を学んだ研究者が自説を展開するときは日本語の例を中心とすることが多い。書評子はこの流れを批判するものではない。ただし、ここには暗黙の了解があり、英語の例を見ているだけでは気づかないことが日本語を見ると見えてくる。もっと言えば、ある理論的立場に対し、英語より日本語の方が多くの証拠を提出できるというものである。これは形態論や統語論では言語形式の裏打ちとして、そのとおりに受け止められて良いかもしれないが、語用論でも同じかという疑問が生じる。特定の形式と意味の対応は文法の問題であって、語

* 本研究は科研費 18K00542、18H00680 および令和 4 年度山口県立大学学術推進共同体（シニア）研究費の助成を受けたものである。原稿の段階で有益なコメントを与えていただいた匿名の査読者に感謝したい。本論中、maxim の訳語としての「格率」、Generalized Conversational Implicatures の訳語としての「一般化された会話の推意」は田中・五十嵐 (2007) から、また contextualization cues の訳語としての「コンテキスト化の合図」は井上 (2015) からお借りしてある。

用論の問題ではないからである。実際、本研究のどこが語用論的かという点は後で詳しく議論するが、まずは関連性理論で言う手続きの意味に依拠した説明を試みている点が語用論的であると言って良い。

本書の主題に入ろう。Grice (1975) が論じているように、and の意味は語用論では原点というべき問題である。以下の例文は井上 (2015: 161) から引用してある。

- (1) a. The capital of Japan is Tokyo and the capital of France is Paris.
- b. The capital of France is Paris and the capital of Japan is Tokyo.
- (2) a. Alfred went to the store and bought some whisky.
- b. Alfred bought some whisky and went to the store.

周知のことを復習すると、(1) の 2 文では a. と順序を入れ替えた b. は同じ意味で理解されるが、(2) で順序を入れ替えた 2 文では、アルフレッドの行動の順序も入れ替わり、a. と b. は同義ではない。そのため、(1) の and とは違い、(2) の and には順序や結果を表す ‘and then’ の意味があると考ええると、and の意味が肥大化してしまう。Grice は and の意味を論理積 ($A \wedge B$ の $\wedge$) として一義的なものに簡素化し、順序や結果といった節間の意味は推論として会話の格率、特に Maxim of Manner から導くことを提案し、これが現代の語用論の発端ともなった。

この議論は英語の例をそのまま見ている分には妥当に思えるが、言語普遍的ではなく、英語（およびヨーロッパ系諸言語）に and のような一見、無色透明の接続詞があるから可能な議論である。事実、(1) と (2) を日本語に訳すと、微妙な違いが生じる。

- (1') a. 日本の首都は東京 {であり/?であって}、フランスの首都はパリである。
- b. フランスの首都はパリ {であり/?であって}、日本の首都は東京である。
- (2') a. アルフレッドは店に {行つて/行き}、ウィスキーを買った。
- b. アルフレッドはウィスキーを {買って/買い}、店に行つた。

(1') では 2 つの節を連用形で接続できても、テ形は不自然になる。一方、(2') では連用形とテ形の両方が可能である。このような形式的な区別を見ると、(2) の and を ‘and then’ と読み込むことに何らかの根拠があるようにも思えてくる。

Ariel (2012) は (1) や (2) のような文接続の and の一義的な扱いを批判し、and には独立的解釈と関係的解釈という 2 種類の解釈方法が区別されると論じている。簡単にまとめると、独立的解釈は第 1 節と第 2 節がそれぞれ独立した意味を表すもので、関係的解釈は第 1 節と第 2 節が結びついて 1 つの意味をなすものである。上記の例で言うと、(1) のように順序を入れ替えても意味が同じものが独立的解釈で、(2) のように順序を入れ替えると意味が通じなくなるか、別の意味になるものが関係的解釈である。この区別は日本語の形式的区分と一致し、著者の議論のベースでもある。

2. 本書の主張

本書の構成を簡略に紹介する。第 1 章は序論で、全体の流れを示してある。第 2 章は英語の *and* の文接続の先行研究を再検討し、文接続の *and* の解釈を 2 分割する Ariel (2012) が有望であると議論される。第 3 章は日本語の文接続の概要を述べるとともに、関連性理論の要点をまとめ、日本語の接続形式と手続きの意味の関係を議論している。続いて各論に入り、第 4 章はテ接続、第 5 章はタリ接続とシ接続を分析し、第 6 章で日英比較の文接続のモデルをまとめている(下記の(4))。これら 3 章が著者独自の議論になっている。第 7 章は本書を振り返る内容の結論である。

注目すべき著者の達成点は、英語の事例を見るかぎり、文接続の *and* については一義的な扱いがスマートに思えるところでも、日本語の観点からは Ariel が言うような分割的アプローチが支持されることを実証した点にある。

著者は、日本語の接続形式は、Ariel の独立的解釈には「～シ、～」と「～タリ、～タリ」が対応し、関係的解釈には「～テ、～」が対応すると議論する(各形式で「～」には節が入るものとする)。著者の議論の特徴は、このように文の形式を決めたうえで、各接続形式の機能を論じる点にある。

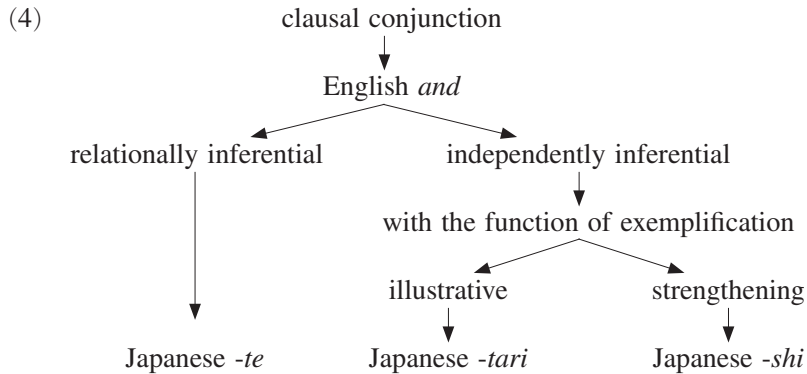
著者は上記の日本語の各接続形式を *structure* と呼ぶ一方、英語の *and* で等位接続された重文 (*compound sentences*) は、単に *and-conjunctions* または *and-utterances* と呼び、*structure* で区分されるものとはしない。本書の 3.2 節で論じられているとおり、英語の *and* で接続された 2 文は文法的に等位だが、日本語のテ接続、タリ接続、シ接続はそれぞれに形態統語論な特色があり、時制がどの節に依存するかに関して違いがある。例えば、テ接続では前半の節は後半の節の時制に依存するが、シ接続にはそのような依存関係はない。さらに 3 者は文内の分布でも違いがある。そのうえで 3 者を 1 セットで論じる理由は 3 者が英語の *and* の等位接続に機能的に等しいからである。

日本語の文接続に関わる 3 形式を *structure* として表すところは用語の問題のようでいて、本書の大きな特色である。

- (3) a. 同じテ形、タリ形、シ形の用法でも、上記の *structure* に合わないものは扱っていない。そのため、テ形単独の言いさし文や、Nakanishi (2013) が論じるようなテが動詞と動詞を組み合わせる用法は扱わない。
- b. 各 *structure* は特有の手続き意味を表し、例えば *-te structure* では「2 つの節を 1 つの推論単位(一続きの内容)として解せよ」の手続きが指令される。
- c. 日本語は節間の関係から導かれるべき推論が文接続の言語形式に反映される点で構造依存的である。これが *structure* という用語を使う理由と思われる。

このようにテ、タリ、シの用法を形式的に限定した結果、本書の議論は抑制的で説明力が高まる一方、テ、タリ、シの全体像が見えてこないところも残る。

著者の主張をまとめた図示 (p. 138) を引用する。



英語の *and* による節の等位接続は、解釈上、関係的と独立的に分かれるが、日本語では両者は形式的に分かれ、前者はテ接続に、後者はタリ接続とシ接続に対応する。さらに後者では、タリ接続は談話の展開を例示 (illustrative) し、シ接続は談話上の想定を補強 (strengthening) するということにより形式と機能の分化が進んでいる。

3. 個別の論点

本書の概略を見たところで、記述面で2点、理論面で2点、批評を加えておきたい。

第一に、著者の言語事実の記述が十分かという問題がある。著者はテ接続に関する代表的な先行研究として Hasegawa (1996) を取り上げ、Hasegawa の説明には当てはまらないが、本書の説明ではうまく扱えるテ接続の例があるとする。次の例は本書 (p. 70) のもので、最初の特節を前置的に読むところが特徴である。なお、以下、本書の例文は原文のローマ字表記を漢字かな表記に改め、番号もここに揃えた。

- (5) 拙宅にもプールがあって、南仏事情に疎かったから、プール付きと言われて飛びついた。

(5) は、著者が論じるように (p. 71)、節の並べ方が時間の流れに一致しない点が興味深い。つまり、南仏事情に疎かった人が飛びついて家を買った結果、その家にプールが付いていたことになる。この観察はとても興味深く、確かにテ接続では第1節が原因となって第2節が続くという Hasegawa の説明には合わない。

著者 (p. 75) は同じくテ接続を扱う三原 (2011) を検討し、(5) では、テ節は談話の展開上、後続の内容の導入部として機能するので、自分の説明に収まると論じている。だ

が、(5) のように第 1 節が第 2 節の結果として解せるテ接続の用法がどうすれば成立するか掘り下げる必要がある。

次は意図的に時間順を前後させた作例だが、思考実験の材料にしたい。

- (6) a. ?9 回裏に逆転のチャンスが来て、1 回裏に 3 番がフライでアウトになった。
- b. 9 回裏に逆転のチャンスが来て、1 回裏に 3 番がフライでアウトになっていて、監督は 3 番に代打を送った。

(6a) は、第 1 節と第 2 節が時間逆行的で、不自然な話し方になる。一方、(6b) のように会話の流れを長くし、第 1 テ節よりさらに後の展開を入れると、第 1 節が第 2 節の前置きとして解せるようだ。(5) は一部だけ切り取ってあるので分からないが、その後の展開もあるものと思われる。これ以上の詳論は控えるが、(5) は、本書が依拠する現代日本の小説から収集した他の例とはレジスターが違い、テ接続の全体像の把握には 2 つの節を見るだけでは足りず、会話分析的な観点も必要なことを示唆している。

また、著者は、関係的なテ接続は 2 つの節が 1 つの推論単位をなすので、第 1 節だけにすると一貫性が失われると論じている。そのため、(7a) のテ接続の前半だけで終えた (7b) は不自然に聞こえる (sound odd) という (p. 85)。?? は本書の判断である。

- (7) a. 東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきて、カラスを撃退するためのプロジェクトチームを発足させました。
- b. ??東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきました。

ただ、この議論は補足が要るだろう。匿名の査読者から示唆されたように、(7b) が不自然な理由は、石原都知事という有名人がトピックなので、これだけでは同知事についてのニュースにならないという事情によると思われる。もっとも、(7b) の文に文法上、欠けたところはなく、(7a) の内容を表すのにテ接続が必須というわけでもない。拙い言い方だが、(8) のように 2 文を並べただけでも、第 1 文が原因で第 2 文の結果に至ったことが推論できる。(8) のような並べ方は、例えば石原都知事に関するニュースの冒頭に特徴的である。

- (8) 東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきました。カラスを撃退するためのプロジェクトチームを発足させました。

この例が示すように、2 つの節から 1 つの推論単位を導く機能はテ接続に固有なものではなく、むしろ談話の一貫性の反映である。

著者は Kehler (2002) に言及していないが、節間の内容で何が一貫するかという問題に取り組んでも良い。Kehler は全ての 2 文間の関係は類似 (Resemblance)、原因と結果 (Cause-Effect)、時空の隣接 (Contiguity in time and space) の 3 種類に集約されるとし

ている。接続関係の細分化とともに、再編と階層的な体系化も必要である。

シ接続に関して短く触れておくと、著者は (9) のような例を基に、シ節は後続の節に前提 (premise) を与えると論じている (p. 119)。

(9) 私は都会育ちだったし、長い戦争のために泳ぎを覚えるチャンスもなかった。

このようにシ節は後続のモと係り結びで呼応するが、本書ではモが議論されていない。文の形式を限定するのであれば、モまで含めた形式の指定が要るのではないか。ただし、このように structure を決めていくと、議論が推論重視の語用論というよりは、予め指定された形式から導かれる解釈として文法の問題になっていくだろう。

第二に、テ接続、タリ接続、シ接続という3者で網羅的かという記述面の問題もある。例えば、終助詞の「わ」では「泣くわ喚くわ」といった定型表現に加え、次のような節と節の等位接続も可能である。

(10) 昨日の登山は大変だった。蛇が出るわ、雨が降るわ、スマホは壊れるわ。

このようなワ節の連鎖は状況のリストという点で例示のタリ接続に似ており、独立的解釈を担うと思われる。ただ、「蛇が出るわ」という1節では使えず、少なくとも2節を続ける点では関係的解釈を担うとも見られる。この -wa structure というべき節の並べ方は、テ接続とは形態統語論では違っても、節を対等に並べる機能では共通しており、これを (4) の分類にどのように入れるかは今後の課題と思われる。

次に理論面で1つ考えたいことがある。テ、タリ、シの各 structure の手続き意味は、常に当該 structure から表されるものか、またはデフォルトで伝えられるが、文脈次第で別の意味に変えられるものかという問題である。「兄は料理人になって、弟は歌手になった」のような対比または並列の用法では内容は2分されたままのため、テ接続は1つの推論単位を表すとは言いにくく、-te structure の手続き的意味はキャンセル可能な会話の推意である。著者の考えとは違うだろうが、本書で言う structure の手続き意味は、個別の文脈に因らず、特定の言語形式の一般的な (デフォルトの) 用法を規定する点で Levinson (2000) が言う一般化された会話の推意 (Generalized Conversational Implicatures (GCIs)) に該当するとも言える。著者 (pp. 17-23) は英語の and の等位接続に関し GCIs による説明を批判しているが、形式と機能の対応が細分化した日本語ではどうなるか再考する価値がある。

理論面ではもう1点、形式重視の本研究の今後の方向に関し、兎玉 (2010: 143) の次の一節を引用しておきたい。

(11) 「接続」という確立した文法用語があるわけではない。「接続」を意味・統語上の「つながり」と考えれば、複数の命題をつなぐことが接続と解釈される。もしそ

うだとすれば、接続標識なしに文と文（または節と節、命題と命題）をつなぐ形式が接続の基本構造であり、接続の前提となるはずである。、、、接続の全体像に接近するためには、接続標識をもつ文内の構造だけでなく、接続標識をもたないで文をつらねる構造を分析することが不可欠であろう。

児玉の意見を敷衍すると、文接続では形式の対応がない表現に正面から取り組む研究が出てくることを期待したい。例えば、「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」といった対句は、接続標識はないものの、一種の関係的解釈を促す表現方法と思われる。形式を手掛かりにすると、どうしても議論が文法寄りになるが、表現の形式によらず、表現の内容から導かれる推論の法則性を議論の方が語用論的である。

4. 今後の展望

最初に記したとおり、本書は著者の学位論文を基にしており、いわば研究者としてのデビュー作とも言え、著者は今後、この成果を発展させていくことが期待される。そこで本書では未解決、未着手の問題に、最後に言及しておきたい。

英語の *and* の等位接続が日本語ではいくつか別の接続形式に分化するという問題設定から著者は出発しているが、著者は専ら日本語の方に進み、英語の研究としては、やや不足感が残る。You drink another can of beer and I'm leaving. のように前半が条件節的に解される英語の *and* の文接続など、本書で触れられるべくして触れられていない事例もある (Culicover and Jackendoff 2005; Francis 2005)。

Ariel の研究は特定の理論で全ての事例を説明しようとはせずに、言語事実から一般化を導く点が特徴である。本書は、そのアプローチが英語より細分化した日本語の文接続の形式によって支持されることを示し、Ariel の主張の妥当性を確認したことにもなる。ただし、著者は Ariel の *and* の2分割解釈は Blakemore and Carston (2005) の *and* の一義的な扱いと両立可能で、Ariel が *and* の語用論的解釈を論じているのに対し、Blakemore and Carston は *and* の意味論を論じているとして両者の調停を提案している。だが、英語の *and* の多様な用法に関し、何が1語に束ねているかには答えていない (p. 145)。これから論じるように、*and* の意味を明らかにすることは *and* を備えた言語の思考法を明らかにすることになる可能性もある。

一般的な観点から言うと、日本語では細かく言い分けるところを英語では一括して表す事例が節間の等位接続以外にあるかという問題がある。文接続の *and* に似て、*or* や *as* も極めて概括的な関係を表しており、このような単語が日本語にあるかという疑問がわく。英語の *and*, *or*, *as* といった単語が表す意味は日本語では助詞や動詞などの活用語尾で表しているという見方も可能かもしれない。言語間の対照語用論には、個別言語の形態論や

統語論を入れる必要があり、一方の言語の語用論的問題が他方の統語論の問題というように対処法の違いが出てきて当然であろう。テ形の諸用法を統語論構造に反映させる近年の試みでは三原 (2015) が参考になる。

日本語のように文接続の形式が細かく分化して各形式の機能が決まっている言語は、聞き手には親切でも話し手の都合ではかえって面倒であり、英語のように2文を *and* で接続しておいて、2文間の関係は聞き手の推論に任せる方が語用論重視で文法は単純で済む。Grice 的に言えば、2文間の関係に関して「必要十分な情報量のあることを言え」という格率を日本語では文法のレベルでも順守するが、英語では、そこまで順守しない。言語間で文法と語用論の範囲が違うとなると、対照言語学から見た語用論は、どうあるべきかというさらに大きな問題に帰着する。やや粗い議論になるものの、言語学の他の分野と比べ、語用論では言語間の対照が、どのように可能か考えたい。

まず語彙は、対照言語学で各言語の特徴を明らかにすることがストレートに可能な分野である。Chomsky (1965: 142) が「語彙は当該言語の不規則性 (irregularities) の総体である」と指摘するとおり (cf. Bloomfield 1933: 274-275)、個々の表現は全て語彙に入るため、語彙の対照では日本語の「兄」と「弟」が英語では同じ *brother* であり、「稲、米、飯」がいずれも *rice* であるといった言語間の違いが明瞭である。

語彙と同じく、English phonology、English morphology、English grammar といった分野も英語に固有の特徴を発音、語形成、文の構造から説明することが目的である。

しかし、English pragmatics という修飾関係に、どこか違和感を覚えるとすれば、語用論が英語という個別言語の特徴を明らかにすることに特に関心はなく、もっと広く、何語にも妥当するような言語コミュニケーションの特徴の方に関心があるからである。実際、ことばを使う上で「関係があることを言え」や「必要十分な情報量のあることを言え」といったガイドラインは何語においても守られるべきであり、一見、そういったガイドラインに反した発言には何かウラがあると推測できるのも何語でも同じと考えられる。また、English pragmatics として理解されている内容も、英米の語用論研究で取り上げられてきた前提や発話行為等に関わる表現を対象としており、そのような表現を他の言語に翻訳することも十分に可能である (Cummins 2019)。

一方、英語では前提の議論は冠詞の *a(n)* と *the* の違いに言及せざるをえず、*the* に類する単語は、どの言語にもあるわけではない。この面だけ見ると英語での前提の表し方は、英語の限定詞の文法の問題に思えるが、実はそうではない。*a(n)* と *the* の違いは確かに前提に関係するが、前提の全てのケースをカバーするものではないからである。

他にも、過去形と現在完了形、*come* と *go* の使い分けなどは、文脈に因るところが多く、語用論の説明が可能であると同時に、英語の語彙と文法に特有なものでもある。この部類に本書が扱う文接続の *and* も入る。このように英語の語彙と文法の特徴でありつつ文脈依存が高い表現の研究が English pragmatics に値するとも言える。

本書の最大の理論的功績は、言語ごとに語用論の内容が違うかという問題提起にある。英語を素材に作られた語用論の理論と日本語（または別の任意の言語）を素材に作られた語用論の理論が細部まで同じかという問題は真剣に研究するに値する。

この問題には2通りの回答があると思われる。1つには、英語の発想、日本語の発想のように、各言語に特有の考え方があるという立場である。これは多くの場合、文法や表現方法に関して問題になる。例えば、*A ten-minute walk takes you to the museum.* といった無生物主語の他動詞文は英語らしいというわけである（西村 1998: 136-161）。それが語用論にも適用され、各言語で、英語らしい推論の方法や日本語らしい推論の方法があるという立場になる。井出・藤井・高梨（2016）、井出・藤井（2020）、井出・藤井・岡・大塚・櫻井（2022）のシリーズのように、近年の場の理論は、そのような方向とも見受けられる。いきおい、このアプローチは言語文化論的な色彩も帯びてくる。

この立場では、文法にしても文化論にしても、ことばは推論を忠実に反映すると考え、ことばの中に意味を多く読み込む方向になる。本書もこの方向に沿って、例えば「～タリ、～タリ」の言語形式には例示という推論制約的な意味が入っているという考えに立つ。この方向を推し進めると、先に記した語彙の記述と同じく、当該言語における表現形式と語用論的機能の対応を大小漏らさず全てリストしていき、巨大な表現辞典を作れば、この表現形式の用法は、この辞典に記載のとおりであるとして網羅できるかもしれない。ただし、これは語用論的な解決策ではない。

2つ目の立場は、ことばは推論を部分的にしか反映しないというものである。これがテヤタリの用法で、文法ではストレートに説明されない用法が残る理由でもある。ある表現において、語彙と文法から表せる意味は推論から伝えられる意味より狭いということでもある。下記は両者の比率を図示したものである。

(12)

言語表現の意味	
語彙と文法（半分未満）	推論（半分以上）

語彙や文法から導かれる意味もある。ただし、文接続に関して英語は *and* の1語で済ませたり、接続詞等のマークがなくても2文間の関係が解釈される理由は、上記のような意味の比率があるからである。また、*-te structure* の解釈が文脈で揺れることから分かるように、日本語でも文接続の意味決定には文法より推論の役割の方が大きい。言い換えると、2文間の関係は基本的に推論で分かることを、個別言語の事情により冗長的に形式で表すことになる。特定の語彙や文法に頼らずに2文間の関係が推論で伝達されるという事実は、先に言及した Kehler が論じるように、人間の思考全般の制約として2文間の関係が類似、原因と結果、隣接の3種に限られることの反映とも言える。

5. おわりに：Sapir-Whorf 仮説の再検討

英語より日本語の方が表現の区切り方が細かいことがある（井上 2015: 47）。これは名詞や動詞に限らず、本書が論じる節間の等位接続のように文法的な側面にも妥当する。英語を見ると語用論の問題に思えることでも、日本語では文法や形態論の問題に行きつく可能性もある。メタファーを使えば、言語表現に意味を送り届けるサービス業があるとしよう。英語の *and* の文接続では、そのサービス業は語用論的推論が独占する一方で、日本語では対応する表現が分化しており、文法や形態論も当該業界に参入している。各言語で文法と語用論の市場シェア率が違うわけである。

ある言語では表現形式に定められているとおりに推論が導かれるとなると、いわゆる Sapir-Whorf 仮説に従い、当該言語を使う人々は言語によって自らの思考が規定されることになる（Whorf 1956）。一方、特定の言語に依存しつつも表現形式から自由なところで推論の余地があるとなると、Sapir-Whorf 仮説から自由になる見込みが得られるが、反対に何を根拠に推論を伝達し、共有しているかという別の問題が生じる。その際に Gumperz (1982) が言うコンテクスト化の合図（contextualization cues）も当該言語の巨大な表現辞典では語彙と同じく記載可能であるとなると、慣習化した韻律や話の展開なども、文接続のテ、タリ、シなどより細かいレベルの形式分化に含まれてきて、上記の言語表現の意味の比率も見直さなくてはならないだろう。

本書の帰結が立ち向かう先の Sapir-Whorf 仮説は、対照語用論にとって現代的な課題である。言語間の表現方法の差異は語用論的説明にとって不都合な現実であり、これに対処しようとして新たな説明が考案され続ける研究推進の源でもある。まさにその 1 つの文接続に関心のある方にだけでなく、言語間での語用論と文法のシェアの違いという大きな問題に取り組む研究者に、ぜひ本書の一読と検討を勧めたい。

参考文献

- Ariel, M. 2012. "Relational and Independent and Conjunctions." *Lingua* 122, 1692-1715.
 Blakemore, D. and R. Carston. 2005. "The Pragmatics of Sentential Coordination with And." *Lingua* 115, 569-589.
 Bloomfield, L. 1933. *Language*. Chicago: The University of Chicago Press.
 Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge MA: MIT Press.
 Culicover, P. and R. Jackendoff. 2005. *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
 Cummins, C. 2019. *Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press
 Francis, E. J. 2005. "Syntactic Mimicry as Evidence for Prototypes in Grammar." In Mufwene, S. S., E. J. Francis and R. S. Wheeler (eds.) *Polymorphous Linguistics: Jim McCawley's Legacy*, 161-181. Cambridge MA: MIT Press.

- Grice, H. P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, Vol. 3, Speech Acts*, 41–58. New York: Academic Press.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hasegawa, Y. 1996. “The (Nonvacuous) Semantics of TE-linkage in Japanese.” *Journal of Pragmatics* 25, 763–790.
- 井出祥子・藤井洋子・高梨博子. (監修・編) 2016. 『シリーズ 文化と言語使用 1 コミュニケーションのダイナミズム：自然発話データから』東京：ひつじ書房.
- 井出祥子・藤井洋子. (監修・編) 2020. 『シリーズ 文化と言語使用 2 場とことばの諸相』東京：ひつじ書房.
- 井出祥子・藤井洋子・岡智之・大塚正之・櫻井千佳子. (監修・編) 2022. 『シリーズ 文化と言語使用 3 場と言語・コミュニケーション』東京：ひつじ書房.
- 井上逸兵. 2015. 『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』東京：慶應義塾大学出版会.
- Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: The Center for the Study of Language and Information Publications.
- 児玉徳美. 2010. 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』東京：開拓社.
- Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, Cambridge MA: MIT Press. (田中廣明・五十嵐海理. (訳) 2007. 『意味の推定：新グライス学派の語用論』東京：研究社.)
- 三原健一. 2011. 「テ形節の意味類型」、『日本語・日本文化研究』21、1–12. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 三原健一. 2015. 『日本語の活用現象』東京：ひつじ書房.
- Nakatani, K. 2013. *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- 西村義樹. 1998. 「行為者と使役構文」、中右実 (編) 『構文と事象構造』. 105–214、東京：研究社.
- Whorf, B. L. 1956. *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge MA: MIT Press.